

ディースターヴェークの大学論

長 尾 十 三 二

目 次

- (1) はじめに
- (2) 大学論の背景
- (3) 大学論執筆の経緯
- (4) 大学論の要旨
- (5) 大学論の評価
- (6) おわりに

ディースターヴェークの大学論

長尾 十三二*

(1) はじめに

ふつうにディースターヴェークの大学論と呼ばれているのは、『文明の死活問題』(Die Lebensfrage der Civilisation, 4 Hefte, 1836 – 38)の第3論文「ドイツの大学の退廃について」(Über das Verderben auf den deutschen Universitäten, 1836)のことである。この論文はひじょうな反響を呼んだ。かれが批判の対象としたのは主としてドイツ、それもとくにプロイセンの大学であったが、これに対する賛否の声は国外からも寄せられたほどである。

レプフーンは、ディースターヴェークのこの著作に関連して書かれた主要な論文として次の9篇を挙げている¹⁾

- (1) F Beneke, Unsere Universitäten und was ihnen Noth thut., Berlin, 1836.
- (2) E.Th.Mayerhoff, Die deutschen, insbesondere die preussischen Hochschulen unserer Zeit, Berlin, 1836.
- (3) E.Puggé, Über das angebliche Verderben auf deutschen Universitäten, Berlin, 1836.
- (4) C.F.S. Alschevski, Über die deutschen Universitäten, Bonn, 1836.
- (5) H.Leo, Herr Dr. Diesterweg und die deutschen Universitäten, Leipzig, 1836.
- (6) C.E.Morstadt, Vertheidigung der Universitätsprofessoren gegen Dr. Diesterwegs Schmähungen und Rezepte, Mannheim, 1836.
- (7) F.Thiersch, Über die neuesten Angriffe auf die deutschen Uiversitäten, Stuttgart und Tübingen, 1837.
- (8) Fr.Ludw.Jahn, Leuwagen für Dr.H.Leo, Leipzig, 1837.
- (9) Ernst Bischoff, Einiges, was den deutschen Universitäten Noth thut, Bonn, (I) 1842, (II) 1848.

(A.Lebhuhn, A.Diesterweg, Bibliographische Studie, 1890, s.37)

このほかW.Menzel編のLiteraturblatt(1838)や、H.G.Brzoska編のCentral-Bibliothek der

* 大学教育研究センター客員研究員／立教大学文学部教授

Litteratur, Statistik und Geschichte der Pädagogik und des Schulunterrichts (1838), さらに Wiener Jahrbüchern der Litteratur (1836)の匿名論文 — この論文には「H」とだけ署名されているが、Thiersch はその筆者を K.E.Jarcke と推定している。Jarcke は1832年以来ウィーンで活躍していたジャーナリストで刑法学者 — などがこの論争に関与したとレプフーンは報告している。

上記9篇の論稿のうち、ディースターヴェークを支持したのは(8)と(9)であり、とくに(8)は体操家ヤーンが、ディースターヴェークに対するハレ大学教授（歴史学）レオの批判に反論を加えたものであった。ただしこれはレオに対する個人攻撃に堕しており、また当時禁止されていた体操とヤーンとの深いつながりという理由も加わって、検閲の網にかかり、発刊後もなく回収されている。後年ディースターヴェークは、このヤーンの論稿に触れ、その意図は了としながらも、それがももとは「Dachteln für H.Leo」, つまり「レオに鉄拳」という題名であったが、検閲官に注意されて「レオにお祝い」と改めたこと、およびこの論文はレオにとっては最悪の著作といわざるをえないことなどを指摘している。(Jahrbuch für Lehrer und Schulfreunde, 1854, in S. W. Bd. 11, s.40, Anm. Nr. 116) (9)はボンの薬学者ビショッフの手になるもので、4章構成の相当長文（210ページ）の論稿であるが、大学教師としての立場から、ディースターヴェークの提案を良心的にうけとめ、論評している。その第2部が1848年に刊行されている。

そのほかでは、(1), (2), (4), とくに(1)が比較のおだやかな態度でディースターヴェークの批判をうけとめた。西ドイツでの最新のディースターヴェーク研究の成果とみなされるシュレーダーの著作（W. Schröder, A. Diesterweg, Studien zu seiner Wirkungsgeschichte in der Pädagogik des 19. und 20. Jahrhunderts, 1978）では、ヘーゲルの伝記作家、ケーニヒスベルクの哲学教授ローゼンクランツが、その論文（K. Rosenkranz; Der Zweikampf auf unseren Universitäten, 1837）において、部分的にはディースターヴェークの提案を肯定していること²⁾、および「若きドイツ」の代表者、随筆家カール・グツコフがすべてを教育的視点から扱おうとするディースターヴェークの態度には批判的ながら、それでも誠実に対応しようとしていること（K. Gutzkow, Leo und Diesterweg, 1838）などが指摘されている。ただし、これらの人々も、ディースターヴェークの批判や提案にけっして全面的に賛成していたわけではなく、ただかれの発言のなかに聴従すべきところがあることを認め、それを肯定していたにすぎない。だからディースターヴェークに対するきびしい反論もまた当然そこには含まれていた。

しかし、そのほかの人々の論稿、つまり(3), (5), (6), (7)は正面からの激しい応酬であった。師範学校長の分際で、大学の実状をよく知りもしないくせに何を言うか、というのがこれらの人々の心の底を流れる共通感情であったらしい。モールシュタット(6)は、冷たく皮肉まじりの対応をしたし、レオ(5)は、ヤーンを激怒させるほど無礼であった。また、ティールシュの反論(7)は実学主義への批判を含んでとりわけきびしいものがあつた。そんなわけで、一般の状況はディースターヴェークにとって明らかに不利であったように思われる。それは彼自身の論調や、論旨の展開の仕方にも一半の原因があつたとせざるをえない。反批判に対するディースターヴェークからの反論は『文明の死活問題』の第4論文の第2部「ドイツの大学

について」(Über deutsche Universitäten, 1838), および「教育学界の係争問題」(Streitfragen auf dem Gebiete der Pädagogik, 1837/38) 等においておこなわれたが, それはどちらかといえば反論というよりもむしろ釈明的再論に近い内容のものであった。晩年, かれは再び「教育的意思と当為」(Pädagogische Wollen und Sollen, 1857) のなかで, 彼のかつての大学批判が正当であったことを強調しているが, もはやそれにかかわりあう人はいなかった。この経過からみて, かれの大学批判は一種の「勇み足」であったとみなすこともできる。そのため, 多くのディースターヴェーク研究者が, この問題にはそれほど深く立入っていない。あるいはむしろ避けてきているようにさえ私には思われる。じっさい, ディースターヴェークの著作集のうちでも, 愛弟子ランゲンベルクの手になる4巻本 (A. Diesterwegs Ausgewählte Schriften; hrsg. von E. Langenberg, 4Bde, 1877/78) は『文明の死活問題』の第1, 第2論文のみを収録しており, F. マンの教育学古典叢書に含まれているザルヴェルク編の3巻本 (A. Diesterweg, Darstellung seines Lebens und seiner Lehre und Auswahl aus seinen Schriften, 3Bde, hrsg. von E. von Sallwürk, 1899/90) は, 『文明の死活問題』をまったく取上げていない³⁾。わずかに第2次大戦後, 東独から出版されたダイターズ編の2巻本 (A. Diesterweg, Schriften und Reden, in zwei Bänden, hrsg. von H. Dieters, 1950) だけが『文明の死活問題』の第1, 第2, 第3論文までを収録している。つまり, 現在までのところ, 『文明の死活問題』におけるディースターヴェークの大学論に接しようとするれば, このダイターズ編の2巻本のうちの第1巻 (S. 190-273) による以外, 重版ないし復刻本がないのである⁴⁾。このことはこの論文に対する一般の評価を明示しているといつてよいだろう。

また, ディースターヴェーク研究の歴史に徴してみても, かれの大学論に触れてこれになんらかの積極的評価を与えているものはザルヴェルクを除けばきわめて少ない。わずかにジーベルト⁵⁾, ヴェルネック⁶⁾のような東独の研究者たちが好意的な新解釈を提示しており, 西独のプロート⁷⁾も示唆に富んだ見解を述べてはいるが, これらはいずれも第2次大戦後の業績である。前述したシュレーダーの近著は, わずか10ページ程度ながら, ディースターヴェークの大学論を, それへの賛否両論まで含めて概観しているが, これもこのような最近の趨勢からの所産とみなしてよい。

要するにディースターヴェークの大学論を, かれの思想全体のなかに, あるいはかれの思想形成過程に位置づけて考察すること, それからまたこの論文を19世紀前半から中葉にかけてのドイツの大学史, 教育制度史, 教育政策史と関連させて解釈するという研究作業は, まだほとんど進められていないのである。私自身の旧稿(「ディースターヴェーク研究(一), 大学論について(1)」, 『西洋教育史研究』, 創刊号, 1972; 「教育の世俗化 ディースターヴェークの大学論」, 『UP』, 1975, 7月号 東大出版会)にしても, 先行研究の空白を指摘し, ごくおおまかな問題提起をおこなった程度でしかない。

本論は, 以上のような研究の現状に対して若干の寄与を果たしたいと願って綴られたものである。

(2) 大学論の背景

さきにも述べたように、ディースターヴェークの大学論としては『文明の死活問題』の第3論文「ドイツの大学の退廃について」が、もっとも纏ったものであり、これにかれの釈明的再論として、『文明の死活問題』の第4論文の第2部「ドイツの大学について」、および「教育学界の係争問題」、『ライン教育時報』の第30巻(1844)に収録された「1844年の大学改革に寄せて」と題する小論、それに「教育的意思と当為」のなかに含まれる若干の議論などを併せて視野のうちに収めれば、それでほぼかれの大学論の全容を把えたことになるという差支えないであろう。しかし、ディースターヴェークの大学批判の主眼は、大学における教育的機能の衰弱というところに置かれていたのであり、その具体的な徴表のひとつとして、大学教師の教授方法の拙劣、あるいはそれへの無関心という事実が鋭く指摘されていることを思えば、『ライン教育時報』(Rheinische Blätter für Erziehung und Unterricht)に収録された次の諸論稿もまた逸することはできない。

Pädagogische Aphorismen (1832)⁸⁾

Über die Lehrmethode Schleiermachers (1834)⁹⁾

このことを注意しておいたうえで、まずかれの大学論の成立事情と、それがかれの思想形成過程において占める位置、それからまたドイツ大学論史上において、それに与えられるべき位置などを考察してゆくことにしたい。

ディースターヴェークの社会人としての生涯は1832年から47年までのベルリン師範学校長時代、つまり41才から56才までの15年間と、その前後、つまりウォルムス、フランクフルト・アム・マイン、エルバーフェルトなどでの教職経験(1812-20)、それに続くメールズでの師範学校長時代(1820-32)までと、ベルリン師範学校長の職(1832-47)を解任されてからの野人としての文筆生活時代(1847-58)、ベルリン市選出プロイセン国会下院議員時代(1858-66)まで、というように大きく三つに区切ることができる。かれはその生涯を通じてつねに論争的であった。しかし、ベルリン師範学校長在職時代は、それがとりわけ顕著であったように思われる。論争の軸、あるいは源として『教職教養指針』(1835, 1838²⁾, 1844³⁾)が存在したことは否定できない。とくに『教職教養指針』の第2版(1838)については、メールズ以来の弟子のひとりであるエムメリッヒの論難(1841)をきっかけとして、それを支援する宗教人と、ディースターヴェークを擁護しようとする弟子たちとの間に、数年にわたる長く激しい応酬があった。¹⁰⁾ 1844年にハルニッシュ(W.Harnisch, 1787-1864)の弟子ドプシャルがこの論争を総括している(J.G.Dobshall; Diesterweg, seine Ankläger und seine Verteidiger vor dem Richterstuhle der wahren Pädagogik, 1844)が、ディースターヴェークはこれにも不満が残ったようで、『ライン教育時報』(1845)紙上で反論している。(Zur modernen (wahren?) Pädagogik, Rh. Bl.xxxi, s.3-36; S.W. Bd.VI, s.385-401)。『教職教養指針』に関連する論争はこれに尽きるわけではないが、その考察は別の機会に譲るとして、ここで注意し

ておきたいのは、本稿の主題であるディースターヴェークの大学論々争と、いま述べた『教職教養指針』（以下『指針』と略記する）の第2版においてかれが示した立場とは密接な関連があるということである。その理由を以下にひとまず述べておきたい。

『指針』の第2版はデンツェル(B.G.Denzel, 1773 - 1838)に捧げられている。デンツェルはイフェルテンでペスタロッチに就いたこともある南ドイツの代表的教育家、1811年以来ヴェルテムベルク最初の教員養成施設、エスリンゲン師範学校長をつとめていた。そのデンツェルに対してディースターヴェークがあえて『指針』の第2版を献じたのはなぜか、それはミュンヘン大学教授ティールシュ(F.W.Thiersch, 1784 - 1860)によるデンツェル批判に対して一矢を報いるためであった。ティールシュは当時高名のギリシャ学者、1826年以来バイエルン政府の教育顧問としてラジカルな人文主義の立場から1829年の「学校教則大綱」を起草している。

すでに述べたように、ディースターヴェークの「大学論」(1836)に対してティールシュが反論したのは1837年のことであるが、そのさいデンツェルもまた名指しの批判をうけた。これに加えて、翌38年にティールシュは『西部ドイツ諸邦、オランダ、フランス、及びベルギーにおける公教育の現状』(3巻)を刊行し、そのなかで再びデンツェルやディースターヴェークを„unheilvoller Plan-und Projektmacher“とか„Volksverführer“つまり「呪うべき計画立案者」とか「民衆を惑わせる案内人」と非難したのである。¹¹⁾人文主義者ティールシュの立場からすれば、他邦のこととはいえ、啓蒙的実学主義の教育を推進しようとする民衆教育の指導者たちの活躍を看過できなかったためであろう。かくてティールシュは、ディースターヴェークとデンツェルにとって、いわば共同の論敵となった。したがってすでに老年のデンツェルにかわって、ディースターヴェークはティールシュにこたえる必要があったのである。¹²⁾

こうして『指針』の第2版(1838)はデンツェルに献じられた。『ライン教育時報』に載った『指針第2版』の刊行予告には次のように記されている。

「私は本書をデンツェルに捧げた。その理由は献辞のなかに述べてあるが、このたびの献辞はひどく論争的なものとならざるをえなかった。われわれはドイツの誇るべき人物の恥辱を雪がずにはいられない」¹³⁾

この論述からも明らかなように、ディースターヴェークにとって、これはもはや私怨ではなく公憤とみなされるべき事柄であった。つまりティールシュの批判は反ドイツ的、反国民的な性質のものとしてうけとめられていたのである。そしてこのことは「指針」の第2版が、「ドイツ的教師のための指針」と改題されていること——初版では「ドイツ的」という限定をまったくつけていない——と深くかかわっている。ディースターヴェークのこのような態度がティールシュに代表される上流教養社会や古典的教養教育の世界、つまりギムナジウムや大学、への対抗意識に根ざすものであったということについては、すでに旧稿¹⁴⁾でも触れたから詳論は避けるが、ともあれディースターヴェークは、デンツェルも自分も、そして民衆学校の教師たちも、現代的、民衆的立場に立っているのに反して、古典的陶冶の必要を力

説するティールシュの主張は反現代的、反民衆的であり、その意味において反ドイツ的であると逆襲した。ここで「ドイツ的」というのは、ドイツ国民的という意味であり、人道的ないし普遍人類的方向を目指すものであって、当時の国民主義一般がそうであったようにけっして偏狭なナショナリズムに奉仕するものではなかった。しかし、より以上に注意しておく必要があるのは、ディースターヴェークが、ドイツ民族の生成発展が現代の課題であり、子どもたちはこの課題を担いうるように、生成発展する教材を、生成発展的方法（自己活動的・経験的方法）によって学習しなければならないという意味の主張を繰返しているということである。これは『指針』の初版以来一貫してきたかれの社会的、政治的立場、すなわち「進歩」の志操、「進歩」の理論の教育的側面であり、上に述べた現代的、民衆的立場をとるドイツの教師の具体的な努力目標でもあった。¹⁵⁾

このようにみえてくると、ディースターヴェークの1836年の『文明の死活問題』の第3論文と、これを批判したティールシュの1837年の論文、それに応えた『文明の死活問題』の第4論文(1838)と「教育学界の係争問題(第2部)」(1838)という大学論々争は、ティールシュの1837年の論文及びその主著『西部ドイツ諸邦、オランダ、フランス、及びベルギーにおける公教育の現状』(1838)におけるディースターヴェーク批判と、これに対する『指針』第2版(1838)の反論という人文主義の比重をめぐる国民教育論々争と、時期的にも、内容的にも密接に関連していることは明らかである。またディースターヴェークによる大学批判の主眼が、大学教師の教授法の拙劣、とくに一方通行の講義法の告発にあったということも、かれの国民教育論における自己活動的学習方法への期待と結びつけてみて初めてその真の意味を問うことができるはずである。

要するに、ディースターヴェークの大学論は、①かれの教授理論の全体系のなかに位置づくものであり、また位置づけて理解すべきであるということ、②大学論々争の制度史的背景として、教養的教育機関の実学的教育機関に対する制度的優越の事実および優越の意識があり、国語や実学的教育内容に対する、およびそれらの教授法上のくふうに対する偏見が教養階級一般に存在したこと、③このことは、たんに教育内容や教育方法の是非優劣をめぐる見解の対立ではなく、民主主義、合理主義、産業主義に対する封建主義、非合理主義、反産業主義という体制の根幹にかかわるような基本的対立でもあったということ、およそこの程度的前提を設けたうえで主題の考察に入ることが必要である。なお、これらの点については筆者の旧稿をも参照して頂ければ幸甚である。

(3) 大学論執筆の経緯

『文明の死活問題』の第3論文「ドイツの大学の退廃について」を執筆した直接の動機は、ディースターヴェーク自身の記述によれば、F・テレミン(F. Theremin, 1780 - 1846)の著作に刺戟されてのことであつたらしい。この本はアダルベルト、ルドヴィコ、テオフィリウス

という3名の人物の対談形式をとった40ページほどの小冊子で、1836年、ベルリンから刊行されている。題名は„Über die deutschen Universitäten”となっており、さらにEin Gespräch von Dr. Franz Thereminと表記されている。その「まえがき」によると、ドイツの大学に学ぶ学生がつねに大きい危険にさらされている状況にかんがみ、その改革論が提唱されているけれども、大学の制度的な改革は至難であるから、「実行がたやすく、しかも学生の学問的陶冶と道徳的品性によい効果をもたらすであろう」ような提案をしてみたいという趣旨のことが述べられており、本論では主としてアダルベルトの口をかりて、口授形式の講義から対話形式の授業への切換えの必要と、その具体的な方策が説かれている。

ディースターヴェークは、第3論文の「まえがき」の冒頭で「小論起草の直接の誘因は、ドイツの大学に関するフランツ・テレミンの言葉 (Franz Theremin's Wort) であった。私は著者殿の提案に賛成せずにはいられないが、しかしまたそれだけに私は、必要とされている大学の改良ないし改造が、おっしゃるような個別的、部分的手段によって可能になるとはどうも期待できない」と述べているから、テレミンの著作に刺戟されて第3論文が書かれたという事実には疑いをいれる余地がないように思われる。

ところがディースターヴェークは、1836年2月18日付のG.W.M.Thilo (1802-76)宛の手紙のなかでは、「クリスマスまえに『死活問題』の第3論文を書き上げた。……………この論文を2週間まえに検閲のためケルンに送った」と書いている¹⁶⁾。テレミンの論文が刊行されたのは1836年であるから、35年のクリスマスまえに第3論文が仕上がっていたというのではつつまが合わない。私は、このつつまを合わせるため旧稿¹⁷⁾でひとつの推論を試みたが、これはテレミンの論文を入手する以前の推論であって、じっさいにテレミンの論文にあたってみると、この推論には無理があるように思われる。しかし、他に妥当な説明ができるとも思えないから、ここでは疑問として残しておきたい。ただディースターヴェークがテレミンの著作を引き合いに出した意図については、旧稿でも述べた通り、テレミンの名声を後楯とする効果を計算に入れてのことと推定してまちがいではないと思う。

テレミンはプロテスタント派の神学者で、1824年以来プロイセンの宗務局委員、39年以後はベルリン大学の教授も兼ねた。当時知名の教養人のひとりであり、その説教は9巻の全集に収められている。してみると、このかなり危険な論文を刊行するにあたって、名望家テレミンの発言を引用するのはディースターヴェークにとってたしかに有効な策であったろう。

しかし、このことはディースターヴェークの大学についての関心がテレミンによって初めて覚醒されたということの意味するのではない。すでにかれは1832年のPädagogische Aphorismen”において、ハレ大学教授ムスマン(J.G.Mussmann, 1798-1833)の著書Vorlesungen über das Studium der Wissenschaften und Künste auf der Universität, Halle, 1832を引用しながら、「教授の一般的原理は村落学校でも大学の講義室でも共通する」¹⁸⁾という主張を展開している。つまりムスマンは大学における望ましい学習の在り方を述べているわけであるが、それはギムナジウムやゼミナールはもちろんのこと民衆学校にも妥当することをディースターヴェー

クは強調しているのである。たとえば、消極的、受動的な学習に代る自己活動的な学習方法の推奨、実生活に密着した学習態度の必要などについて、かれはムスマンの指摘に全面的に同調している。

また彼は、シュライエヤマッハーの死を悼んでおこなった講演(1834.6.14)や、ものした論稿のなかで、その卓越した教授方法に触れてこれを絶讃している。¹⁹⁾

ディースターヴェークが、シュライエヤマッハーの講義を聴いたのは、1832年の夏学期におこなわれた政治学の講義と、1832/33年の冬学期におこなわれた心理学の講義であった。おそらくベルリン着任早々のディースターヴェークが、向学心に燃えて、シュライエヤマッハーに頼みこみ、特別の聴講許可を得たのであろう。かれ自身の告白によれば、どちらの場合も一貫して聴講することはできなかったらしいが、それにしても非常な感動をうけたことは事実であった。そしてここでも彼は大学改革のための重要な条件のひとつとして、大学教授の講義形式の変革を、シュライエヤマッハーを引き合いに出しながら、強く訴えている。

要するにそれは体系的知識を整理して口授する方法よりも、知識の生成の過程を明らかにしつつ、学生の知的、精神的自己活動を促進するような方法を選べ、という主張である。かれによれば、シュライエヤマッハーは、日常生活の用語から出発し、これを吟味しつつ徐々に問題提示をしてゆくから、講義の内容が互いに網の目のようにかかわりあい、発展が発展を生み、連続して終わることがない。聴講者はかれとともに考えながら進み、やがて高次な学問体系の全体に導かれてゆく、その意味で彼は学生にとっていわばソクラテスの如き存在である。この方法は学生に精神的な空腹を感じさせ、みずからの力で、この眼覚まされた欲求をみだす道を見出させるものであり、人間の本性にかなった合理的なものであって、明晰、素朴である。ともディースターヴェークは言っている。

ディースターヴェークは教授法を *akroamatisch* と *erotematisch* つまり口授形式と問答形式とに二大別し、前者には(1)既成の知識をたんに伝授するものと、(2)知識体系の因果関係や成立過程を説明するもの、後者には(1)既習事項についてたんに質疑応答をおこなうものと、(2)自主的思考能力を発展させるような問答をおこなうもの、とがあるといい、そのなかでもっとも望ましいのは問答形式の第2型、ついで口授形式の第2型であるとしている。²⁰⁾シュライエヤマッハーの場合は、口授形式の第2型のもっとも理想的な事例であったように思われる。ともあれ、ディースターヴェークの大学に対する関心が、とりわけそこでの教授方法の在り方と結びついていたということは明らかであり、この点についてはすでに指摘した通り、少なくとも1832年までその端緒を遡ってみることができる。²¹⁾

しかしながら、ムスマンやシュライエヤマッハーに依拠して述べられた教授方法論は、教授方法の一般的原理を主張するにとどまっておき、けっして積極的に大学あるいは大学教授を批判するというような性質のものではなかった。これに反して『死活問題』の第3論文は、テレミンの主張を援用してはいるものの、さらに歩を進めて大学の抜本的改革の必要を指摘し、大学教授たちの覚醒を求めたもので、前2者とは明らかにその調子を異にしている。教

授方法に対する批判が重要な位置を占めているという意味では、それまでのかれの大学に対する関心の系譜と強い一貫性を認めることができるけれども、第3論文では大学を教育機関として位置づけ、その視点から苛責のない大学教授批判をおこなったのであるから、これをかれの大学観の転換点とみなすこともできる。そしてこの見地は晩年の「教育的意思と当為」(1857)にまでうけつがれている。

(4) 大学論の要旨

『文明の死活問題』の第3論文「ドイツの大学の退廃について」の内容は、旧稿でも紹介したから、簡単にその要旨だけを述べることにする。

ディースターヴェークは、ドイツの大学が時代の要求に合致しておらず抜本的な改革が必要である、という。その退廃の証拠は、大学が青年たちを駄目にしていくという事実である。むろんこれは社会的な退廃の一徴表にはちがいないが、大学教授たちは進んでこの退廃を是正する責任がある。大学は教授たちの努力で改革されるべきだ。

そこでまず在るべき大学像、大学評価の尺度をきめる必要がある。それはひとつには真の学術性の有無ということ、ふたつには教育的陶冶ないし教育の有無ということである。真の学術性(Echte Wissenschaftlichkeit)とは、いわゆる博識的教養のことではない。それは自己活動的思考、思考の自己活動性(Selbsttätigkeit des Denkens)のことである。大学の教師はこの能力を学生の身につけさせねばならぬ。しかしみずから研究者であることと教師であることは両立しがたい。新しい探究には Genie が必要であり、教えるためには Talent が必要である。大学の教師は Genie を欠いても Talent を欠いてはいけぬ。そこで研究者のためのアカデミーを大学とは別に設けるのが有効であろう。大学の教師は、学生を教えることについて内的には使命感を、外的には Talent をもつべきである。この点、ヘーゲルもフィヒテもシェリングも教師失格である。また、大学の教師は、まだ十分に検証されてもいない自己の新説を、あたかも不動の真理ででもあるかの如く学生に提示したりなどすべきではない。それは *Lehrfreiheit* の拡大解釈であり、学生の *Lernfreiheit* を侵害するものである。

次に大学は教育施設であるから、教育的見地からいっさいの処置がとられねばならぬ。まず消極的には青年の徳性を傷つける恐れのある事物、人間、施設、風習を除去すること、積極的には自己活動的思考の態度や能力を発達させるような教授方法および教授内容を採用すること、保健・体育を重視すること、洗練された教養や社交性を身につけさせること、学生組織については、専攻領域ごとの、いわば専門の原理と、出身地ごとの、いわば郷土の原理の双方を活用すること、公共生活に対しては、学生というひとつの身分集団であることを自覚しつつ地域社会にその位置を占めるべきこと、大学の教師は、①学生の能力を発達させる才能、②学生を感化する徳性、③祖国愛という三資質を具備すべきこと。

以上が大学を評価する尺度である。

この尺度によって評価するとどんなことになるのか。ディースターヴェークは、まず大学の教師について、①学問的方向性、②教授法、③志操の3点からの考察をしている。

学問的方向性としては、知識の偶像化が目立ち、精神的能力の陶冶がおこなわれていない、要するに不毛の博識が幅を利かしているから、学生は勉強嫌いとなって卒業する。

教授法は口授型式の一方通行的講義に墮しており、所与の知識を素材として討論し、思考力を発展させるという配慮には欠けている。

また教授の志操(*Gesinnung*)についていえば、かれらの多くは郷土への愛着心を欠き、金銭と名誉を求めて渡り歩き、もっぱら学生の人気とりだけに専念して大学の雰囲気をはびこらせている。またかれらは大学の規程に従わず、開講、閉講の期日も出鱈目で、講義内容について互いに協定することもしない。学生との間柄も金銭づくであって人格的接触は無きにひとしい。さらに教授相互間には嫉視と反目が強く、徒党を組んで対立しあっている。かれらには徳や義務あるいは公共生活への献身の念が欠落している。これでは学生が退廃したり、非行をおかしたりするのも当然であろう。教授たちはまずもって学生指導の責任を果たすべきである。

つづいてディースターヴェークは大学教授以外の諸条件を吟味する。

大学をとりまく環境をみると、大都市がとくに悪化している。学生が放恣な生活に陥るのは、温い雰囲気の下宿に恵まれず、転々と宿を変え、食事も不規則になり、話し合える仲間にも恵まれていないためである。学生登録は事務的に処理され、監督もなく、金と時間はあり余っている。しかも開講の期日は遅れる。開講されても教授のお出ましは15分、時には20分遅れるのが普通であり、その講義内容がまた退屈ときている。これでは青年たちのエネルギーがあらぬ方向に放出されてもあたりまえである。このエネルギーを教師との精神的な交流に、体育に、あるいは健全な社交に、とふり向けることをくふうすべきであろう。しかるにこのような退廃的状况が一般化しても人々はその対策を真剣に考えようとしていない。

ではどうしたらよいのか、ディースターヴェークも、大学の全面的な改革は至難であることを認める。大学をとりまく国民生活や社会制度の改革が先行すべきだからである。しかし大学自体で遂行可能な条件もないわけではない。それは、たとえば、教授の人事の改善、教授の負うべき講義時間、講義内容の明確化、教授法の改革、奨学金受給者の厳選、教師への固定給の支給（学生からの謝金の廃止）などであり、また評議会および教授会の民主化と学生に対する生活指導体制の強化、体育の奨励などである。そのほか大学の周辺および内部における風俗営業の不許可、決闘の禁止、大学法廷の設置なども提案されている。

最後にディースターヴェークは、大規模大学にはアカデミーを付置すべきであると提案している。アカデミーは研究者の団体であって、ここでは学問の最新の成果が報告されるが、この報告は6ゼメスターを終えた学生その他も聴講できる。²²⁾

以上が『文明の死活問題』の第3論文「ドイツの大学の退廃について」の要旨である。

(5) 大学論の評価

ディースターヴェークに対する反論は、レオやモールシュタットのように感情的な反撓をむき出しにしたものから、ベネケのように比較的冷静にうけとめているものまで、まことにさまざまであるが、ともあれ批判した側と反論した側との間に、大学観ないし学問観をめぐる険しい対立があったことは明らかである。そしてこの対立の様相については、さきにも述べたようにドイツ、とくにプロイセンの大学史、端的にいえばベルリン大学成立以後の大学の状況と、そこにおける学問観や大学観、とりわけ教授たちの学問観や大学観と、産業化社会の期待する学問観、大学観との相剋という事実がまず注意されねばならない。そして、それに加えて既成の優越的立場に立つ人文主義的学問観、大学観の側における新興の、未成熟な実学主義的学問観、大学観への嫌悪ないし排斥の感情の伏在が指摘されねばならぬ。

次にディースターヴェークの大学批判が、とりわけ教授たちの道義的責任を衝いており、しかも場合によっては行政当局による監督の必要まで示唆しているためそれが、教授たちの逆鱗に触れたことも否定できない。それは研究・教授の自由を謳ったベルリン大学の理念に対する重大な侵害であり、侮辱であるとうけとられたのであろう。そうでなくとも1820年代の大学は反動的文教行政のもとで屈従を余儀なくされてきたのである。1830年の7月革命がもたらした束の間の解放気分も、ハンバッハ集会(1832)やフランクフルト警察本部襲撃事件(1833)を境として、自由主義、立憲主義の運動はふたたび弾圧され、多数の逮捕者を出した大学の責任がきびしく問われ始めている、そんな状況のなかで、そしてディースターヴェークも明らかにそのような大学の状況に関連させて大学を、とくに大学の教師を告発したのであるから、反撓の強かったことは当然であろう。ただし、ディースターヴェークの批判に対して異議を唱えた人々が、学内における民主主義的グループに属する人々とみなしうるのかといえ、それは当たらない。ただ少なくとも主たる反対者は実学主義的立場をとる人々ではなく、人文(教養)主義的立場をとる人々であったとだけはいいうるであろう。いくら大胆な言い方をすれば、ディースターヴェークと、その批判者との大学観における対立は、いわばフンボルト的人文主義的大学観と、シュライエヤマッハーの実学主義的大学観との対立であったと表現してもよい。²³⁾じっさいディースターヴェークの所論には、たんに教授法の問題だけでなく、大学そのものの性格づけにおいて、シュライエヤマッハーの大学論と通ずるところが少なくないのである。しかし、このことについてはまたあとで触れることにしよう。²⁴⁾

さて、以上のような状況を念頭におけば、師範学校長の分際でとか、大学をよく知りもしないくせに、とかいう非難に加えてティールシュのように、ディースターヴェークは「プロイセンの文教当局と結託して」²⁵⁾いるとか、レオのように、ディースターヴェークは「大学教授になりたがっている」²⁶⁾とかいうような人身攻撃に類する発言が繰返されたのもうなづける。じっさい、ディースターヴェークは1832年12月28日付で、ベルリン大学での開講許可

を求めており、その後も1847年2月28日、1850年4月11日と、再三にわたって同種の要望を提出したが、いずれも実現をみていない²⁷⁾。また、当時コブレンツの学務委員で、やがてアイヒホルン文相（在職1840-48）の片腕に迎えられる（1840）G・アイラーズ（1790-1863）は、ヨハネス・シュルツェ — アルテンシュタイン文相（在職1817-38）の腹臣 — に宛てて、ディースターヴェークの大学論への共鳴の気持を書き送っている²⁸⁾。のちにディースターヴェークと険しく対立することになるアイヒホルン・アイラーズ路線との奇妙な符合はこれだけではない。1844年4月17日付のアイヒホルン文相の規程 — 大学の全学部宛てて学生指導法の改善を求めたもの — を、ディースターヴェークは支持し、『ライン教育時報』紙上でこれを論評しただけでなく、規程の全文を収録している²⁹⁾。

してみると、ディースターヴェークに対する余りにも感情的とみえるほどの反論が、必ずしもひどく的外したものとばかりは言い切れないようにも思われてくる。さらに、ディースターヴェークが、学生あるいは聴講生としての立場以外に大学を知らなかったということも弱点といえれば弱点であった。かれはヘルボルン（1808（夏）-1808/09（冬））、ハイデルベルク（1809（夏））、チュービンゲン（1809/10（冬）-1810/11（冬））の三大学に学んでいる。大学ではほとんど得るところがなかったかのようには彼は言っているが、少なくともチュービンゲンの天文学教授ボーンベルガーや、数学教授プライデラーからは大きい影響をうけたとみなしてよい³⁰⁾。しかし、社会人となってからの彼は、さきに述べたシュライエヤマッハー以外には、ベルリンでヘーゲルを聴講した（1825）ことがある程度で、本格的な大学批判、とくに大学教授批判を展開するにはやはり情報不足であったように思われる。レオが「余計なおせっかいをするな」（Schuster, bleib bei deinem Leisten）と言ったり³¹⁾、モールシュタットが皮肉たっぷりに „Herr Seminariarch“ とか „Herr Calumniant“ ,あるいは „Sir Diesterweg“ つまり「師範学校長殿」とか「中傷屋殿」あるいは「ディースターヴェーク先生」などという軽侮的な修辞を使った³²⁾のも、実情を知りもせぬくせに、というかれらの優越感からであったろう。たしかにフィフテやヘーゲル、さらにまだ存命中のシェリングの実名まで挙げて論難し、ヘーゲルを「史上最悪の教師のひとり」であるとまで罵倒した³³⁾のでは、売り言葉に買い言葉的反応が出たとしてもある程度やむをえないと言うべきかもしれない。それがディースターヴェークの真意を誤解させる大きい要因となったのは双方にとって残念なことであった。

結局、冷静な討論になりえたと思われるのは、第一に大学を教育機関とみなすことの是非、第二に、大学における教授方法としての問答法あるいは討議法の可否について、だけであったといつてよい。

第一の点については、これを研究と教育の分離論と等置して批判する人々が多かったように思われる³⁴⁾。ティールシュやレオ以外にマイヤーホフ、プゲたちがこの点を問題にした。研究の才と教育の才の不一致が事実上存在するにしても、制度的に研究機関と教育機関を分離することは、益よりもむしろ害の方が多いと人々は主張したのである³⁵⁾。しかし、ディースター

ーヴェークの大学論は、すでに見たように、単純な研究・教育分離論ではない、それはシュライエヤマッハーの大学論³⁶⁾がそうであったように、学問的精神や態度の覚醒、形成を本旨とするものであった。したがってティールシュが批判した³⁷⁾ような職業教育本位の専門学校主義とは明らかに区別されるべきである。

第二の点については、たとえばアルシェフスキーは、問答法は学問の教授には不適當であり、口授法ないし講義法の方が望ましいと主張した³⁸⁾。プケ³⁹⁾、マイヤーホフ⁴⁰⁾、モールシュタット⁴¹⁾、ローゼンクランツ⁴²⁾、そしてベネケ⁴³⁾に至るまで、討議法における教授能率の低下を予想している。むろん、講義を活気にみちたものにする、部分的に問答法を併用することなどには多くの人々は必ずしも反対ではなかった。しかし、それより以上に、ディースターヴェークが求めた講義内容の深化とか自己活動的学習態度の強化などということは、すでに自分たちの間で考えられ、実行されている、というのが教授たちの主張であった。かりにそれをもっと徹底しておこなえというのであれば、それは大学と小学校とを同一視するものではないかとかれらは開き直ったのである。しかし、ディースターヴェークの主張をみると、学生に対する大学教授の指導責任を、小学生に対する小学教師のそれと等置して論じているのではないことは明らかである。大学は国民の指導者たるべき人材を教育する任務を負っているのだから、大学はたんなる知識伝達の場であってはならない。高次の教育施設でなければならぬ、これがディースターヴェークの原則的な主張であった⁴⁴⁾。かれは大学改革を社会改革の前提として期待していたのであり、かれの大学批判は大学教育論として、さきにも述べたように、『教職教養指針』の第2版における反人文主義的論旨と関連させて教育学的視点から検討されるべきであった。しかし、『文明の死活問題』の第1、第2論文に続く第3論文として世に問われた以上、それが政治的発言としてうけとられ、必要以上の反撓を招いたのは、やむをえないことであった。

(6) おわりに

ディースターヴェークの側からの再批判は、すでに述べたように積明的再論の色彩が濃い。しかし、第4論文の第2部で、かれは若干の点で見解を改めたことを認めながらも「大筋において変化はない」と言い、「わが国の大学は、客観的学問的見地からいけば多くの成果を挙げてきた、主観的方法的見地からいけばほとんど無為であった。愛国的見地からいけばその貢献はほとんどゼロに等しい。道徳的見地からいけばマイナスの方向に働いた、これが私の見解の大筋であり、基本である」と断言している⁴⁵⁾。

ただし、ここでの彼の論争の目標が宿敵ティールシュに置かれていたことは否定しがたく、ティールシュ一派との戦いは「生活のもっとも尊い資産のための戦いである、それは各方面における進歩にかかわる戦いである」と言い、「したがって、ティールシュについて語ることは、たんに大学についての彼の見解に関してだけでなく、彼の全体的方向に関して語るこ

となのだ」として、ティールシュの古典的人文主義を斥けている⁴⁶⁾。ディースターヴェークは「係争問題」の第2部でもティールシュに対して批判を向けているが、ここでも大学論の領域だけでなく、全面的な対決をいどんでいる。してみると、彼の大学論はやはりまず『指針』の第2版と関連させ、ティールシュとの思想的対立を吟味しながら読むべきであろう。そしてそのうえでドイツ大学史あるいは大学論史上の位置を定めてみるべきであろう。ディースターヴェークと反対者たちとの間で、まともな討論になりえたふたつの論点、つまり(1)大学を教育機関とみなすことの是非、(2)大学における教授方法としての問答法あるいは討議法の可否などということは、げんにわれわれ自身の検討すべき問題点のなかに含まれていることを想起するのも、あながち無意味ではないと思う。

なお、ゲッチンゲンの七博士事件(1837)に際してヘルバルトのとった態度は、ディースターヴェークをいたく失望させたことを付言する⁴⁷⁾。

〔注〕

- 1) 9篇のうち(6)を除いてすべて私のところに複写がある。
- 2) ローゼンクランツは、1848年に再びディースターヴェークの大学論を取り上げて批判している。(Schróder, a.a.O., s.28) なお、ローゼンクランツに、„Verteidigung der deutschen Universitäten gegen Diesterwegs Anklagen“と題する論文(1836)があるが私はまだ見ていない。
- 3) ただし、ザルヴェルクは解題においてディースターヴェークの大学論を弁護し、支持している。(Vorwort, LIV – LXI)
- 4) 『死活問題』の第3論文の複写は増井三夫氏の好意によって入手した。
- 5) H.Siebert, A.Diesterweg, Kap.11, Volk und Wissen, 1953.
- 6) H.Warnecke, Diesterweg und die Hochschulpädagogik in „Diesterweg und Wir“, s.164 – 169, Volk und Wissen, 1967.
- 7) H.G.Bloth, A.Diesterweg, s.138 – 40, Quele und Meyer, 1966
- 8) Rh. Bl., N.F., VI, 1832 (S.W.Bd.2, s. 484 – 507.)
- 9) Rh. Bl., N.F., X, 1834 (S.W. Bd.3, s.251 – 68)
- 10) この件については、東京教育大学外国教育史年報、『西洋教育史研究』, 第2号および第3号(1973, 74)を参照して頂きたい。
- 11) Thiersch, a.a.O., Bd.I. s.421 usw.
- 12) 前掲、『西洋教育史研究』, 第2, 3号所収の拙稿「ディースターヴェーク研究」を参照して頂きたい。
- 13) S.W., Bd.4, s.266.
- 14) 前掲『西洋教育史研究』, 第2, 3号所収の拙稿「ディースターヴェーク研究」
- 15) 前掲『西洋教育史研究』, 第4号所収の拙稿を参照して頂きたい。
- 16) Bloth, op.cit., s.198 (Briefe Diesterwegs, Nr.13)
- 17) 前掲『西洋教育史研究』創刊号所収の拙稿
- 18) Pädagogische Aphorismen, S.W.Bd.2, s.484.
- 19) Über die Lehrmethode Schleiermachers, S.W., Bd.3. s.251 – 68, Anm.Nr., 295, 321, 322.

- 20) op.cit., Nachschrift, s.259 – 61.
- 21) 古典語教育の告発についてだけいけば、1822年2月17日の日記にもその態度は明示されている。
(H.G.Bloth, Aus A.Diesterwegs Tagebuch, 1818. bis 1822. s.64 – 67)
- 22) ディースターヴェークの大学論の内容は、シュライエヤマッハーの大学論(Gelegentliche Gedanken über Universitäten in deutschen Sinn nebst einen - Anhang über eine neu zu errichtende, 1808) から多くの点で示唆をうけているように思われる。とくに研究者団体としてのアカデミーと関連させた教育機関としての大学の位置づけや役割については、ほとんどシュライエヤマッハーのそれを踏襲しているといつてよい。ただし、国家(行政)と大学との関係や、大学における学生の処遇については意見の食い違いが目立つ。これはやはり大学人であったシュライエヤマッハーと非大学人であったディースターヴェークとの立場の違いとみるしかない。シュライエヤマッハーの教授方法論については、ディースターヴェークは全面的に賛意を表しているのであるから、その他の点についても謙虚に学んで、そのうえで発言したならばもっと説得力のあるものになったのではないかと惜しまれる。おそらくディースターヴェークはシュライエヤマッハーの大学論を読む機会、聴く機会に恵まれなかったのであろう。もしそんな機会があったとすれば、彼の性格からみて、必ずそれを引用しているに違いないからである。
- 23) K.Müller (hrsg. von), *Gymnasiale Bildung*, 1968. ではフンボルト、ヘーゲルを人文的理念の側に置き、シュライエヤマッハーを実学的理念の側に置いている。これは中等教育についてのことであるが、高等教育についても当然同じように考えてよいと思う。
- 24) 注, 22) 参照
- 25) Thiersch, *Über die neuesten Angriffe*, a.a.O., s.50.
- 26) Leo, *Herr Dr.Diesterweg und die deutschen Universitäten*, a.a.O., s.134.
- 27) Warnecke, a.a.O., s.164. Bloth, a.a.O., s.125. ディースターヴェークのこの申出はけっして唐突なものだったわけではない。すでに1817年、彼の僚友ハルニッシュはブレスラウの大学での開講許可を文教当局に申出て許可されている(1818)。開講の理由は、神学生に将来、町村の視学委員として必要な知識を与えるため、ということで、聴講生もあった。しかし、1820年3月23日付でこの講義は禁止されている。理由は大学の評議会と二つの神学部が、この種の講義は不必要であり望ましくもないと決定したためである。(Bloth, ebenda)
- 28) Bloth, a.a.O., s.140.
- 29) Rh. Bl. : XXX, s. 208 – 38, s.589 – 90: この規程は Rönne の法令集, 第2巻にも収録されている。(s.515 – 19)
- 30) Bloth, op. it., s. 49 – 50.
- 31) Leo, a.a.O., s.135.
- 32) Morstadt, a.a.O., s.26, 16, 27; zit, von Schröder, a.a.O., s.29.
- 33) Diesterweg, *Über das Verderben auf den deutschen Universitäten*, s.6 – 7; H.Deiters, a. O., s.203.
- 34) とくに Thiersch, a.a.O., s.46 – 48.
- 35) たとえば Leo, a.a.O., s.113f.
- 36) 注, 22) を参照されたい。
- 37) Thiersch, a.a.O., s.146.
- 38) Alschevski, a.a.O., s.22, 29f.
- 39) Puggé, a.a.O., s.34f.
- 40) Mayerhoff, a.a.O.: s.108f.
- 41) Morstadt, a.a.O., s.49, zit. von Schröder, a.a.O., s.31.

- 42) Rosenkranz, a.a.O., s.34f.
- 43) Beneke, a.a.O., s.50.
- 44) Diesterweg, a.a.O., s.1 – 2.
- 45) Diesterweg, Über deutsche Universitäten, 1838. s.56.
- 46) Diesterweg, a.a.O., s.53 – 54.
- 47) Diesterweg, a.a.O., s.71.

Diesterweg und Hochschuldidaktik

Prof.Dr.Tomiji Nagao *

Wir können die folgenden als die wichtigen Schriften, die Diesterweg über Universitätsprobleme verfaßt hat, aufzählen.

- (1) Pädagogische Aphorismen, 1832.
- (2) Über die Lehrmethode Schleiermachers, 1834.
- (3) Über das Verderben auf den deutschen Universitäten (Die Lebensfrage der Civilisation, der dritte Beitrag), 1836.
- (4) Über deutsche Universitäten (Die Lebensfrage der Civilisation: der vierte Beitrag, 2 Teil), 1838.
- (5) Die Streitfragen auf dem Gebiet der Pädagogik, 2 Teile, 1837/38.
- (6) Zur Reform der Universitäten im Jahre 1844, 1844.
- (7) Pädagogisches Wollen und Sollen, 1857.

Man könnte auch sagen, daß die dritte Schrift am wichtigsten ist; denn sie hat den größten Widerhall gehabt. Das ist auch meine Meinung, die ich hier erläutern möchte.

- (1) Diesterweg hat immer vom didaktischen Standpunkt einen Teil der Professoren kritisiert. Aber in der dritten Schrift ist er in den Bereich der Moralität eingetreten. Das war sein Fehlschlag. Er hat das früher nie gemacht.
- (2) Er hat die Lehrmethode Schleiermachers bewundert. Aber er hat nicht gewußt, wie man den Schleiermacherschen Plan der neuen Universität (Universität zu Berlin) durcharbeitete. Gelegentliche Gedanken über Universitäten im deutschen Sinn nebst einem Anhang über eine neu zu errichtende, 1808 ... Wenn er diese Schrift gelesen hätte, hätte er die Universität wegen der Unfähigkeit der Professoren nicht so streng getadelt.
- (3) Er schreibt am Anfang der dritten Schrift, daß die nächste Veranlassung zur Abfassung der vorliegenden kleinen Schrift. „Franz Theremin's Wort über die deutschen Universitäten“ brachte. Adolph Lebhuhn hat also in seiner biographischen Studie geschrieben, daß die dritte Schrift wahrscheinlich durch die Schrift „Über die deutschen Universitäten. Ein Gespräch von Dr. Franz Theremin, Berlin, 1836“ angeregt wurde. Aber Diesterweg hat in seinem Brief (18. 2. 1836) an Thilo geschrieben, „Vor Weihnachten noch habe ich einen dritten Beitrag zur Lebensfrage geschrieben. — Ich habe den Aufsatz vor 14 Tagen zur Censur nach Cöln gesandt.“ Es gibt hier einen Widerspruch.
- (4) Der eigentliche Streitpunkt zwischen Diesterweg und seinen Gegnern war nur der folgende.
 1. Ist die Universität vielmehr eine Lehranstalt als eine Forschungsanstalt?
 2. Ist die erotematische Methode in der Universität geeigneter als der akromatische Vortrag?

* Gastforscher, Forschungsinstitut für die Universitätsbildung, Hiroshima Universität / Professor, die literarische Fakultät, Rikkyo Universität

Sein Vorschlag, Forschung und Lehre institutionell zu trennen, ist dem von Schleiermacher ähnlich. Warum hat man gegen den Vorschlag Abneigung gehegt? Weil die Universitäten damals schon meistens in der Sachlage die Lehranstalten waren. Je weiter sich der Zustand der Universität vom Ideal W. v. Humboldts entfernt, um so mehr sehnen sich die Professoren nach dem Ideal. Diesterweg hat auch erstens für die Universität echte Wissenschaftlichkeit und zweitens pädagogische Bildung oder Erziehung in Anspruch genommen.

Über die Lehrmethode in der Universität handelt es sich nur darum, daß dieselbe entwickelt oder nicht. Aber die Bedingungen, die die Aufnahme der erotematischen Methode ausführbar machen, sind noch nicht gewachsen.

- (5) Der fundamentale Streitpunkt der beiden ist, ob man entweder den traditionellen Humanismus oder den aufgehenden Realismus nimmt. Wir müssen also auf die sozial-geschichtliche Betrachtung größeren Wert legen.